

子宮がん検診（神奈川方式）

動 向

神奈川方式による子宮がん検診は、昭和44年日母設立20周年を記念して神奈川県産婦人科医会との協力事業としてスタートしたものである。県下の医会会員診療機関から郵便により送付されてくる細胞、組織材料について鏡検・判定を行い、その結果を医療機関に返送するシステムである。通常、日母方式とも呼ばれている。

精度管理については、当該医療機関の協力により、精密検査対象者についての追跡調査が当協会の臨床検査部により行われ、県産婦人科医会のご協力により年一回の報告会を開催している。

永年、細胞診を主体として子宮がん発見に成果を収めてきた神奈川方式であるが、平成21年10月、わが国でもヒトパピローマウイルス（HPV）16型、18型の感染を予防するワクチン（サーバリックス）の接種が承認され、ついで平成22年4月より条件付きながら（細胞診によりベセスダ分類がASC-USと判定された患者に対し）HPV核酸同定検査が保険採用となったことにより、子宮頸がん予防対策に大きな変革をもたらした。

もう一つの子宮がん検診に係わる大きな課題は、「受診率向上をいかに図るか」である。神奈川県では、行政検診、職域検診、ドック等併せても現在の受診率は20%程度で、しかも高齢者の繰り返し受診が多いとされており、国が目標としている50%には遙かに及ばない。改善努力が求められている。

尚、国より子育て支援の一環として「女性特有のがん検診推進事業」が9月より施行された。国が100/100の予算にて、子宮がん検診（20歳～40歳の5歳刻み）の対象者に、各市町村より検診手帳とクーポン券が配布された。

クーポン券利用者2,000名についての予備的な調査ではあるが、クーポン券利用者の初回受診率は78.3%と高率で、異型細胞出現率も1.9%（クーポン券以外1.0%）であった。検診未受診者の掘り起しに成功している。

方 法

実施方法についても昭和53年に日母（現日産婦人会）がん対策委員会がまとめた子宮がん検診の標準化（日母方式）答申を踏襲してきたが、平成18年、がん検診実施指針の改正、更に平成22年からベセスダ方式の採用と大きく変わった。体がん検診についても、頸がん検診受診者の内、問診の結果不正出血、褐色帯下、月経異常のある者で検診を希望する場合に内膜細胞診を行っている。

さて、最後になりましたが、神奈川方式子宮がん検診の生みの親である、本協会学術委員、杏雲堂病院名誉院長・天神美夫先生が本年10月8日逝去されました。永年にわたる先生のご指導に感謝し、ご冥福を祈ります。

子宮頸がん検診

平成21年度の子宮頸がん検診受診者は33,276名（前年度30,720名）、平成17年度に3万人台に達したあと伸び率は軽微である。

若年子宮頸がんの増加傾向に対応して平成18年度の指針改正から検診対象となった20歳代も4,923名（前年度4,507名）で今後の増加が期待される。

今年度がん確定者は47名、発見率0.15%（前年度65名、0.21%）で微減した。内訳は頸がん42名、体がん3名、その他のがん2名であった。その他のがんの内訳は卵巣がん再発、卵巣がん病期不詳、各1名であった。

年齢階級別がん確定数は、29歳以下2名、30歳代17名、40歳代11名、50歳代4名、60歳代8名、70歳代以上5名であった。50歳以上の高年齢層から体がん3名、その他のがん2名が発見され、進行期頸がんの発見数（9名）も多い傾向は変わらない。

病期別的には、39歳以下では、発見された頸がん47名中、0期14名、Ia期1名、Ib期以上4名で早期がんが多く、一方40歳以上では、28名中0期9名、Ia期0名、Ib期以上11名、病期不詳1名、腺がん2名の他、体がん3名、その他のがん2名で、進行がん、頸がん以外のがんが多い傾向は変わっていない。

頸部腺がんは増加が指摘されているにもかかわらず、今年度も2名のみで頸がん確定者中4.2%であって、この方法の限界と考えられる。

異形成については、確定者数242名、発見率0.73%（前年度229名、0.75%）であった。内訳は軽度異形成123名、中等度異形成74名、高度異形成44名、腺異形成1名であって、頸がんに対し異形成の増加傾向に変わりなかった。

年齢階級別では、39歳以下154名（発見率1.07%）、40歳以上88名（発見率0.47%）であって、若年齢層の発掘の重要性を示している。

子宮体がん検診

平成21年度の体がん検診受診者は7,806名（前年度7,677名）、頸がん受診者数の23.5%（前年度25.0%）であった。

がん確定者は26名（発見率0.33%）。内訳は子宮体がん23名、体がん以外の悪性腫瘍として卵巣がん3名が発見された。その他、内膜増殖症が17名（発見率0.22%）、頸部異形成が1名発見された。

年齢階級別がん確定者数は30歳代1、40歳代2、50歳代8、60歳代11、70歳代4名であった。増殖症の年齢分布は30歳代1、40歳代8、50歳代5、60歳代1、70歳代2名であった。

病期的には0期（異型内膜増殖症）0、I期15、II期以上8名であった。

関係の集計表は101頁に掲載